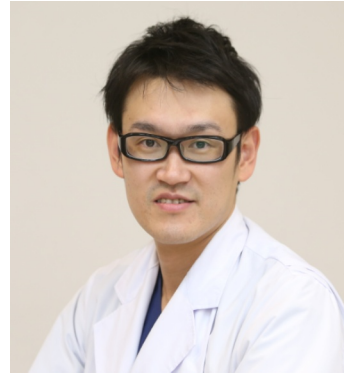


JUA Newsletter for Next Uro-Generation

東海地方版

愛知医科大学

森永 慎吾 先生
(もりなが しんご)



はじめに

私は現在、愛知医科大学で日々多くの患者さんと接して勉強しています。愛知医科大学を卒業後、同大学での初期研修を終え泌尿器科へ入局し4年目となります。

泌尿器科を専攻した動機

実際、泌尿器科はマイナーな科というイメージが強く、なかなか学生のポリクリ時や研修医期間中にも泌尿器科と接する機会は少ないと思います。私自身も、学生時分は「泌尿器科＝尿のこと」という素人的なイメージが強く、泌尿器科を専攻することは当時全く思っていませんでした。しかし、初期研修医として愛知医科大学病院で働き始めた際、先輩研修医が泌尿器科

を大変楽しそうにローテートしている姿を見ることで、私自身も泌尿器科に興味を持ち泌尿器科を選択することとしました。実際にローテートしてみると、

泌尿器科では前立腺・腎・膀胱・尿道・精巣・後腹膜・副腎など多部位を扱い、また局所麻酔の小手術から開腹手術などの大手術、またロボット手術など幅広い手術も経験でき、診療から治療、その後のケアまで一手に経験できるということを実感することが出来ました。初期研修医時期に泌尿器科は非常にやりがいのある科と感じた頃から、私も気付けば足を踏み入れており現在に至ります。

泌尿器科医としての毎日

毎日の病棟診療に加え週1日の外来診療日があり、多くの患者さんと接することで多くの症例経験を積むことが出来ています。また週3日の手術日に様々な手術を経験することで、手術の腕を磨くことも出来ています。実際、泌尿器科入局時では1日数人しか診察出来なかった外来診療でも、現在では1日数十人単位で診察出来るようになり、まだまだ若輩ではありますが診察のスキルの向上を実感しています。また手術に関しても、入局時には何も出来なかったところから現在は比較的余裕を持って内視鏡操作などは出来るようになりました。上級医の先生方

の手術の助手も経験することで手術時に見えているものも入局時と比べると広がっていると実感しています。

また、臨床診療に加えて研究が出来るというのが、大学病院として本教室の特徴のひとつでもあると思います。私自身も臨床研究として、「ロボット支援前立腺全摘除術の予後に関連する病理学的因子の検討」というテーマで日本泌尿器科学会総会において学会発表を行いました。同僚には「前立腺癌の抗癌剤耐性機序の解明と克服」など様々なテーマで基礎研究を行っている者もあり、本教室は臨床から研究まで様々なことを学ぶことが出来る場所だと感じています。海外学会も含め積極的に学会参加出来ることも日常診療や研究のモチベーション向上につながっており、私を含め医局員全員が毎日研鑽を積んでいます。

医学生、研修医の先生方へのメッセージ

先にも述べましたが、泌尿器科は「診断から治療、その後のケアまで一手に行うことが出来る」ことが最大の魅力だと思います。患者さん一人一人と向き合って診療を行うことを皆さんがご希望されるなら、是非泌尿器科を検討してみてください。最近では当初4人で始まっ

た若手ゴルフコンペが、他関連病棟の医師も参加するような14人のコンペになるなど、仕事以外の充実した時間も得ています。どのような人間性も認められるそんな名古屋大学泌尿器科医局での生活を過ごして、泌尿器科医としても大きくなり、将来は後輩への手術やゴルフ指導へとつなげていければと思っています。我々に興味を持たれた場合にはご連絡いただけると幸いです。充実した日々を皆さんも過ごしてください。

名古屋大学

石田 昇平 先生
(いしだ しょうへい)

プロフィール

医学生および初期臨床研修医の皆さん、こんにちは。このニューズレター、さらにこの記事までたどり着いているということは、すでに泌尿器科、しかも東海地方の泌尿器科に少なからず興味がおありのことと思います。東海地方出身の方や、大学もしくは研修病院が東海地方の方、もしくはそうでない方も、ここでおいしかった方には泌尿器科の良いところ、とくに名古屋大学泌尿器科グループの魅力に触れて帰っていただきます。どうぞ最後までお付き合いください。

泌尿器科医への希望

私はもともと京都生まれ、京都育ちですが、大学は西の九州・宮崎大学へ。そもそも中学・高校とラグビーをしていたことから漠然と、スポーツドクターになりたい、とのことで医学部に入学したわけですが、医学部生として年次を重ねていくにつれ、医者というものはスポーツドクターだけではなくことに気づかされていくのです。広く浅くではありませんが学生として医学を一通り学ぶにつれ、一生の仕事としてどの分野に進むかというのは卒業間際の自分にとって非常に重要な問題でした。私の場合は9年生の時に脳神経外科に進むか泌尿器科に進むかで迷いました。もともと外科系に進みたい、という希望はあり、さらにせっかくなら専門医数が少ないスペシャリストになりたいという希望を持つようになったからです。脳神経外科はその響きからも「ザ・スペシャリスト！」という感じがしますが、泌尿器科に関しては「スペシャリスト？」というイメージがつきまといま

というような関係は泌尿器科には当てはまりません。内科的な診断および検査から切除・再建などの手術まで、全ての守備範囲を泌尿器科は求められるのです。そこまで色濃く患者さんおよび疾患に関われるスキルを持つ泌尿器科を、スペシャリストと呼びずになんて呼ぶの、ということに気づいてしまったわけです。さて泌尿器科の素晴らしさに気づいてしまったからには、次は臨床研修をどこにするかが大問題でした。もう、泌尿器科医として充実した研修を送るためなら実家の京都で研修なんて言ってもらえない、という感じがします。臨床研修もしつかりでき、かつ、泌尿器科としてもスムーズにスタートが切れる場所はどこかと探し、たどり着いたのが名古屋でした。というのも名古屋はもともと臨床研修が盛んな地域であり、臨床研修制度の黎明期の混乱に全国が直面している中、はるか昔より年間の臨床研修制度を修了した後に専門分野に進む、という風土が根付いていたからです。もちろん、その中でも泌尿器科の症例が多い病院を中心に見学に回り、ある市中病院を研修先として選びました。結果としてその選択が現在の名古屋大学での勤務につながるのですが、それは次のエピソードで。

他大学出身の逆襲

というわけで、縁もゆかりもない名古屋に単身やってきて、さらに泌尿器科になるべく研修をはじめたわけですが、この時点ではもちろん入局などするはずもなく一研修医として仕事をしていました。大学とのつながりといえば、この研修病院の泌尿器科が名古屋大学泌尿器科の関連病院であったことくらいで、特に前もって大学に挨拶に伺うことなどもしませんでした。こ



の科に進むと決めて医者になったものの、働いているうちに、やはりこの科の方が自分に合っている、というところで進路が変わることなど良くあることで、また私もそうすべきだと思っていたからです。しかし、働いているうちに心変わりをするでもなく、泌尿器科医になりたい願望はさらに強くなったため、まず研修先の泌尿器科に改めて挨拶に行きました。そうして進路が決まってからは、後期研修を見据えて、泌尿器科医になるにあたり興味を持つ範囲が小さくならないような初期研修の送り方、アドバイスのようなものを、その病院の泌尿器科、さらには所属していないにも関わらず機会あるごとに大学の医局の先生からも受けたわけでした。そういつた先輩方の情熱や日々の診療を見て憧れ、またそうになりたいと思つて後期研修に突入することになりました。右も左もわからないまま研修先を選んだにも関わらず、研修先に恵まれ、順風満帆な船出ができたのと、今になって思います。日頃の行いが良かったせいで、まさに自分の人徳のなせる業かなとも思いましたが、よくよく考えてみると、周りの先生が上手に遭難しないように航路を引いていただいていたなと感謝する次第です。当初は名古屋大学の関連病院ということで、地方の大学出身者としては肩身が狭い思

いをするのではとも危惧しましたが、そこは全く感じることはない開かれた雰囲気を守られつつ、その年代にあった手術、処置などを系統的に教えていただき、徐々に覚醒への研鑽を積むことになったのです。裏技というか、裏技ではないですが、泌尿器科に興味がある時点で大学の医局に相談に来ていただけると、医学生なら研修先はどこを選ばべきか、研修中ならどういったことを中心に研修し、どこで後期研修を送るかなど、その後のキャリアプランについてもつと相談に乗ってもらえると思います。というか、いつでも相談に乗ります。どうぞ気軽に、ご連絡ください。というわけで、感謝こそすれ逆襲するわけもなく泌尿器科医としてスタートを切ったその後の私および名古屋大学泌尿器科グループ（帝国？）については、次のエピソードで。

大学への帰還

大きい水槽ではほとんど大きなが、小さい水槽ではそれなりの大きさにしかならない金魚のように、優秀な泌尿器科医になるためにはそれなりの水槽が必要だと思えます。この場合、取り扱っている疾患・手術の幅だけでなく、医療の質もふくめての医療および教育体制が水槽と言えるでしょう。私の場合は初期臨床研修を含めて約一〇年、関連病院にいましたが、その間

にいろいろな疾患や手術、手技を経験させてもらいました。具体的には腎、副腎、前立腺、膀胱について、開放手術だけでなく腹腔鏡手術、ロボット手術、内視鏡手術などです。また排尿障害や腎移植、小児泌尿器、結石の内視鏡手術、腎不全治療、性機能、前立腺の小線源療法など分野も多岐にわたり経験させてもらいました。また勤務先の病院では取り扱っていない分野

についても、医局内のどこかの関連病院にはその分野のスペシャリストがいることで、常に知識や手技のアップデートを所属している医局員に定期的に還元する制度もあります。これが非常にありがたかったです。見たことも聞いたこともない分野は、その人の中の選択肢としてあつてこないため、医療の幅がぐっと狭くなってしまう。その点、名古屋大学の関連施設では、腹腔鏡手術や内視鏡手術はほぼ全ての施設で、またロボット手術は施設、腎移植も四施設で施行しているなど、関連病院であつても先端の医療を経験できる環境にあります。また新しい分野の開拓にも明るく、脂肪幹細胞を用いた尿失禁治療など、先端医療と呼べる分野にも積極的に取り組んでいます。大学ではそれに加えて排尿障害を中心とした基礎研究や臨床研究も行っており研究面でも充実した設備が整っている環境と言えるでしょう。

う。こういった土壌で育てられたため、関連病院から大学に異動した際も、全く違和感なく医師としての日常を継続することができました。一般病院は臨床のみを行うところ、大学病院は先端医療と研究を行うところ、というような垣根なく、常日頃からそういう視点で物事を考えられるような風土があつたからです。

エピソード

この名古屋大学泌尿器科の中で基礎を固め、自分の興味がある部分を伸ばして、それぞれの特性にあつた泌尿器科医への覚醒ができるよう、私も頑張っておりますし、またそのお手伝いできればと思っております。

あなたの泌尿器科医人生において名古屋大学泌尿器科が共にあらんことを。

藤田保健衛生大学

深見 直彦 先生

(ふかみ なおひこ)

泌尿器科とは

はじめまして未来の泌尿器科を背負って立つ先生方。泌尿器科はどんなイメージでしょうか？私の学生時代の泌尿器科のイメージは正直良くなりませんでした。そんな私は漠然と外科系を専攻したいと思っていました。

医局勧誘会に参加した時に、星長先生（現学長）の移植にける情熱を聞いてから患者さんに対し熱心に診療する科であると感じました。また、泌尿器科は高齢者疾患が多いため、高齢化社会では患者さんの数が減ることとはない有望な診療科と判断し入局しました。入局してわかつたことは非常に診療の幅が広い科であることでした。小児泌尿器科疾患から高齢者疾患である排尿障害や腎移植、感染症、尿路結石などの良性疾患だけでなく、前立腺癌をはじめとする悪性疾患も診察します。また、診断から治療まですべての事に関わりを持つことが出来る科です。

その後の私は

二年間研修医として大学に勤務後、大学院に入りました。研究テーマは移植免疫学を専攻し、夜な夜な動物実験室のマウスと格闘しながら実験を行っていました。当時は夜遅くなると実験室以外の電気は消えヒトの気配がなくなり、マウスの動く音しか聞こえない異常な空間でした。そこに一人だけ居るといつの間にかマウスに話しかけている自分が出てやばいと思つたことがあります。医師八年目にミズーリ州Washington University School of Medicine in St. Louisで移植免疫に関して三年半留学をしました。留学してよかった事は、異文化に接してさまざま

な人種の考えを直接肌で感じたこと、他のラボの日本人研究者とホームパーティー（飲み会）を行い、今でも家族ぐるみで親しくしていることです。帰国後の現在は週二回の大学付属病院での外来を行い、他病院での手術指導を行っています。また、今年で医局長の任期が四年目になり、上司の提言（お小言？）から部下の上申（突き上げ？）と日々対応しています。

当科の特徴について

当科では“最小な侵襲による最大限の治療効果”を念頭に常に最新治療の導入や個々の症例に適した治療技術の選択を行っております。主な特徴としては、

低侵襲な腹腔鏡およびロボット支援手術です。当教室は2009年より東海地区では初となるダビンチによるロボット支援手術（前立腺癌）を開始し、ロボット支援下腹腔鏡下腎部分切除術に関しては全国に先駆けて2010年より開始しました。ロボット支援手術の症例数は国内トップクラスであり、2016年までに1000例以上のロボット支援手術を施行しております。

また、進行性膀胱癌に対するロボット支援膀胱全摘除術では積極的に腔内尿路変更術（回腸導管、代用膀胱）を施行しています。良性疾患（膀胱腫瘍、骨盤臓器脱、腎盂形成術）にも応用し良好な治療成績を得ています。

他にも、前立腺癌に対する密封小線源療法、腎臓移植（生体腎および献腎）、前立腺肥大症に対する経尿道的前立腺核出術、小児泌尿器疾患（膀胱尿管逆症や水腎症）の根治手術など多岐に渡り、年間の手術症例数は1500例を越えています。研究面では腎癌の抗体療法、腎移植に関しては免疫寛容、腎保存と遺伝子発現、前立腺癌発症に起因するDNA変異、細菌遺伝子など多岐に渡り、国内外の研究施設や学内の総合医科学研究所、他の専門分野との共同研究も活発に行われております。また、スタッフ全員が留学経験者であり、当医局は積極的に留学を勧めています。

白木教授とは

2014年2月より白木良一先生が第三代主任教授に就任しました。白木教授を一言で言うとな医局員の誰よりも元気で誰にでも親しく接する事が出来る方です。例えば高知大学の井上教授がロボット手術の見学で来院された時、二人は意気投合され白木教授が「医局旅行を高知にします」と言われると井上教授が「了解しました」と即答されました。あれよあれよと2016年6月、医局旅行は高知訪問となり、高知大学泌尿器科の先生方が盛大な懇親会（飲み会）を開いて頂きました。まさしく白木先生の人柄が垣間見られた瞬間でした。